

# 石橋湛山の農業政策論と報徳思想の影響

並松信久

- 1 はじめに
- 2 田中王堂と二宮尊徳
- 3 小日本主義と農業
- 4 日本的プラグマティズムと政策理念

## 要 旨

石橋湛山（1884 - 1973、以下は湛山）は1946（昭和21）年に大蔵大臣となり、1954（昭和29）年には通商産業大臣、そして1956（昭和31）年には内閣総理大臣となる（戦後は主に政治家として活動するが、晩年には立正大学の学長をつとめている）。しかし湛山が著名であるのは、政治家としてよりも、経済評論家としての活動である。そのなかでも「小日本主義」と「新農業政策」を提唱したのは特筆すべきことである。

湛山は学生時代に、日本にプラグマティズム哲学をもち込んだ田中王堂（1868 - 1932、以下は王堂）から大きな影響を受ける。王堂はアメリカ留学から帰国後、日本においてプラグマティズム哲学に近い考え方をもちた2人の日本人を評価した。すなわち福沢諭吉（1835 - 1901）と二宮尊徳（1787 - 1856、以下は尊徳）である。王堂によって描かれた尊徳は、自制と社会改良から成り立つ報徳思想を形成した人物である。しかし尊徳は社会改良家ではなく、個人主義と実験的理想主義の思想家であるという。

王堂は尊徳を日本的プラグマティズムを代表する人物であると説明するので、その王堂から教えを受けた湛山は、当然、尊徳の報徳思想の影響を受ける。「小日本主義」や「新農業政策」という概念は、報徳思想が具現化したものであるといえる。湛山はこの概念のもとで、2つの考え方を語っている。1つは自然資源よりも人間の能力に注目しなければならないこと、もう1つは農業利潤が決して低率ではないことであった。湛山は農業や経済は、生産や分配から考えるのではなく、人間（生活）から考えるべきであるという。

報徳思想は王堂によって取り上げられ、そして王堂から湛山へと伝えられた。言い換えれば、尊徳 - 王堂 - 湛山という一連の流れは日本的プラグマティズムの展開過程であったともいえる。この流れはプ

ラグマティズムという欧米思想を、報徳思想という日本の伝統的な思想が受け皿となって受容し、それを実践した過程であったともいえる。

キーワード：石橋湛山、田中王堂、農業政策、報徳思想、プラグマティズム

## 1 はじめに

石橋湛山（1884 - 1973、以下は湛山）は、1956（昭和 31）年 12 月に岸信介（1896 - 1987、以下は岸）を選挙で破り自由民主党総裁となり、内閣を組閣した人物である<sup>1)</sup>。内閣総理大臣職は翌 1957（昭和 32）年 2 月に病気のため辞任するが、病気回復後の 1959（昭和 34）年に訪中し、毛沢東（1893 - 1976）や周恩来（1898 - 1975）と会談して、日中友好を目的に石橋・周共同宣言を出している<sup>2)</sup>。さらに 1960（昭和 35）年には日米安保条約改正問題で当時の岸首相を批判する。この第二次世界大戦後における石橋の行動からもわかるように、湛山は剛直で出処進退のいさぎよい自由主義者として知られている。中国文学者の竹内好（1910 - 1977）は湛山を評して、

日中間の重要問題のほとんどすべてに、石橋さんは適切な発言をしている。適切というのは、原理は一貫しながら、その時に応じて状況的に変る発言ということである<sup>3)</sup>。

として、その一貫した考え方と柔軟な姿勢を評価している。

湛山の簡単な経歴を追ってみよう。湛山は日蓮宗学僧である杉田湛誓（1924 年総本山身延山久遠寺 81 世法主）の子として東京で生まれ、母方の姓を名のって山梨県で育つ。1907（明治 40）年に早稲田大学文学科卒業後、東京毎日新聞社に入社する。しかしまもなく退社し、1911（明治 44）年に東洋経済新報社に入社し、急進的自由主義の政治経済評論を発表する（1941（昭和 16）年に湛山は東洋経済新報社の社長になる）。早くからケインズ（John Maynard Keynes, 1883-1946）の経済理論に注目し、その紹介につとめているが、1924（大正 13）年には新平価金解禁を主張し、浜口雄幸（1870 - 1931）内閣の旧平価解禁を批判した。それとともに軍国主義や帝国主義を痛烈に批判し、戦争中も言論の自由を主張し続けた<sup>4)</sup>。戦後の 1946（昭和 21）年 4 月の総選挙で東京から出馬するが落選する。しかし同年 5 月に吉田茂（1878 - 1967）内閣の大蔵大臣となり、ケインズ理論に基づく積極策で経済再建に取り組む。翌 1947（昭和 22）年 4 月に静岡県から衆議院議員に当選するが、1 ヶ月後に公職追放される。追放解除後、1952（昭和 27）年から 1963（昭和 38）年まで衆議院議員に復帰する。

この衆議院議員在任中と重なる 1952（昭和 27）年から 1968（昭和 43）年まで立正大学の学長職に就いている。学長職の在任中に、湛山は幾度も二宮尊徳（1787 - 1856、以下は尊徳）を取り上げている。たとえば、

私は今年の年賀葉書に、いわば新年の銘として、二宮尊徳の次の言を印刷した。(中略) 私は今日のが国の時務に対して、一の良い示唆を与えるやに感じて選んだのである。わが大学の復興のごときにもまたこうした実際の処理が必要であろう<sup>5)</sup>。

また、「卒業生諸君におくる」と題して、

私には特に愛読書というほどのものはありませんが、もし、しいて申すなら『二宮翁夜話』は、その一つだといってよいでありましょう<sup>6)</sup>。

と卒業式で語っている。これらは湛山が晩年に語っている言葉であるが、湛山の人生において尊徳あるいはその思想である報徳思想が大きな影響を与えていたようである。

晩年は大学の学長をつとめていたが、湛山の経歴を端的に表現すれば、経済評論家としての活動から政治家への道を歩んでいる。経済評論家や政治家として湛山は多くの足跡を残し、数多くの著書も残している<sup>7)</sup>。したがって湛山に関する研究成果も数多く存在する。そのなかでも必ずといってよいほど言及されるのは、学生時代の恩師である田中王堂(1868 - 1932、以下は王堂)からの影響である。王堂は明治期日本にプラグマティズムの哲学をもち込んだ哲学者として著名であるが、早稲田大学において教鞭をとっているときに湛山を指導している。大学卒業後の湛山の活動は、王堂から大きな影響を受けたものであったことは、よく知られている。

ところで、この王堂はプラグマティズムの哲学を日本にもち込むにあたって、尊徳を評価したことで知られている。王堂は日本的プラグマティズムとでもいうべきものを尊徳の思想や活動のなかに見い出している。したがって湛山が尊徳を取り上げるのは、王堂を介してであったことはまちがいない。湛山は王堂を介して尊徳の報徳思想から、どのような影響を受けたのであろうか。湛山が尊徳を取り上げ、示唆を得たといっているにもかかわらず、これまでの研究ではこの点を考察した研究成果は数少ない。皆無であるとはいえないまでも、直接的に触れたものはほとんどないといってもよい。とくに湛山は経済評論家としても政治家としても農業政策論を展開しているが、その一方で報徳思想が農業思想という側面をもっていただけにもかかわらず、湛山の農業政策論と尊徳の報徳思想との関係は明らかになっていない<sup>8)</sup>。

本稿では、王堂によって評価された尊徳の報徳思想が、経済評論家であり政治家であった湛山にどのような影響を与えていたのかを考察していきたい。とくに当時としては独創的な考えが展開された湛山の農業政策論への影響を考えていきたい<sup>9)</sup>。以下では、まず王堂が報徳思想の何を評価し、何を批判したのかを考察して、王堂によって形成された日本的プラグマティズムを明らかにしていく。次にその王堂に影響を受けた湛山が唱えた小日本主義、および小日本主義が反映された新農業政策論を取り上げ、日本的プラグマティズムの影響、つまり報徳思想の影響を明らかにしていきたい。そして最後に、尊徳から王堂へ、そして湛山へとつながる日本的プラグマティズムの展開があったことを示して、それが報徳思想の一系譜であったことを明らかにしていく。さらに湛山の農業政策論を見直す

ことによって、現在の農業政策に対する示唆を得たいと考えている。

## 2 田中王堂と二宮尊徳

湛山は日蓮宗の学僧の子として生まれているので、当然ながら日蓮宗の影響を受けている。それは単に影響を受けたというだけでなく、湛山独自の日蓮観が形成されている。近代日本には日蓮宗から影響を受けた思想家が多いが、湛山の日蓮観は、たとえば北一輝（1883 - 1937）、井上日召（1886 - 1967）、石原莞爾（1889 - 1949）による「国家主義的な日蓮信仰」ではない。また一方、高山樗牛（1871 - 1902）、宮沢賢治（1896 - 1933）、尾崎秀実（1901 - 1944）のような国家や俗性を超越した「日蓮・法華を通しての宇宙実相の信仰」でもない<sup>10)</sup>。湛山は国家主義に反対して「世界主義」の立場に立ち、その一方で現世からの超脱にも反対して、実際の「人生中心」の世界観をもっていた。湛山による日蓮観は他と異なる独特な面をもっていた。日蓮主義者からみれば、湛山の日蓮に対する造詣は深いといえないのかもしれないが、湛山は多くの日蓮主義者とは異なった見解をとっていた。しかもこの見解はその後に影響を受ける日本的プラグマティズムや報徳思想に通ずる面をもっていた（詳しくは後述）。

湛山は自分自身の思想だけでなく、生き方自体も日蓮から多くの影響を受けていた<sup>11)</sup>。自らの出自から宗教家となることを意識していた湛山は、日蓮の影響から、宗教を道徳や政治などと同様に、人間の生活機関（生活の方法）の一部であると考え、宗教が生活に不便を与えるものであれば、新しい方法を現実のなかから見い出さなければならないと考えるようになる。やがて日蓮宗だけでなく宗教全般に対して、仏や神を介して自己を絶対化するという思想から距離をおくようになり、「もし誤っていれば正せばよい」という相対主義的な考え方もつようになる。こういった考え方は日蓮宗自体から生まれるのではなく、他の思想からの影響も垣間みえる。湛山がもった相対主義的な考え方は、その特徴から明らかにプラグマティズムの影響である<sup>12)</sup>。

湛山がプラグマティズム的な考え方をもちえたのは、学生時代の王堂からの影響である。後に湛山は「私は、先生によって、初めて人生を見る目を開かれた」。「もし、今日の私の物の考え方に、なにがしかの特徴があるとすれば、主としてそれは王堂哲学の賜物であるといって過言ではない」と述懐している<sup>13)</sup>。湛山は王堂を、

徹底せる個人主義、自由思想家として最も夙く最も強く、正しき意味に於て日本主義を高唱し、  
我国独自の文化の宣揚と完成とに一生涯を捧げたる哲学者王堂田中喜一<sup>14)</sup>。

と評している。これは王堂の墓石に湛山が記した碑文であるが、王堂の足跡が集約されている。湛山はこの王堂から影響を受けているが、王堂がもち込み提唱した日本的プラグマティズムを学生時代に受容した。

王堂は中村正直（1832 - 1891）の家塾同人社、東京英和学校（青山学院の前身）、東京専門学校

(早稲田大学の前身)、京都の同志社などで学んだ後、1889(明治22)年からアメリカへ留学する。シカゴ大学に在籍して、ジェイムズ(William James,1842-1910)<sup>15)</sup>やデューイ(John Dewey,1859-1952)などからプラグマティズム哲学を学び、1898(明治31)年に帰国している<sup>16)</sup>。プラグマティズム哲学はそれを唱える人物によって異なる面をもっているが、この哲学が生まれたアメリカの思想的な背景は共通しており、プラグマティズム研究者の魚津郁夫によれば、4つに要約することができる。(1) 体系を排すること、(2) 眼前の事実を重視すること、(3) 物事の理由を権威に頼らずに独力で探求し、結果をめざして前進すること、(4) 定式を通して物事の本質を見抜くこと、である<sup>17)</sup>。このような共通の思想的背景のもとでジェイムズとデューイにパース(Charles Sanders Peirce,1839-1914)を加えた3人によって、アメリカのプラグマティズム哲学が形成される。共通の背景をもっていたとはいえ、3人はそれぞれプラグマティズム哲学形成のきっかけを異にしている。デューイはマルクス主義を特徴づける社会性ないし政治性、ジェイムズは実存主義の主体性ないし宗教性、パースは分析哲学の論理性ないし科学性であった<sup>18)</sup>。このように哲学形成のきっかけはいくつかあったが、王堂の場合は、どれかに重点をおいていたというわけではなく、まさにプラグマティズム流の相対主義的な立場から包括的に自分の考え方を展開していった。周知のように、元来プラグマティズムは定義することが困難であり、諸教説を網羅するような普遍的な定義が存在しないので、異なる文化的・歴史的背景に立つプラグマティストの主張や知識を包括的に説明することは難しいとされる<sup>19)</sup>。しかし、このことは言い換えれば、王堂が日本の文化や歴史を背景にしてプラグマティズム哲学を柔軟に形成する余地をもっていたといえるのである。

王堂はアメリカから帰国後、東京高等工業学校、早稲田大学、立教大学などで哲学の講義を行なっている。講義をするかたわら明治末期頃から文芸評論家としても活躍し、プラグマティズムの立場から思想・文芸両面で多彩な評論を行なっている<sup>20)</sup>。このなかで表された王堂哲学の大きな特徴は、わが国哲学界の主流であったドイツ観念哲学とは異質であるプラグマティックな「活動的一元論」に基づいて、人間生活中心の作用的・発展的・相対的な理論を唱えたことであった<sup>21)</sup>。王堂の考え方は当時の日本のドイツ観念論哲学とは、当然ながら相容れないものであった。1905(明治38)年の1~2月に東京帝国大学の桑木巖翼(1874-1946、以下は桑木)が『哲学雑誌』に「プラグマティズムに就て」という論文を発表する。これをめぐって王堂との間に激しい論争が繰り広げられる。桑木はドイツ観念論を哲学の典型とみていたので、プラグマティズムを哲学衰退の産物と考えていた。それに対して、王堂はプラグマティズムを哲学勃興の産物とみなした<sup>22)</sup>。この論争を通して王堂哲学はわが国の哲学界においては主流ではない傍流であるとみなされ、広く普及するものにはならなかった。

湛山は大学在学中の講義を通じて、王堂哲学に出会う。湛山によれば、王堂の講義内容の根本は「相対的自由思想」を特徴とする倫理観と、その根底にある「活動的一元論」の哲学方法にあった<sup>23)</sup>。

そして王堂の哲学は、欲望統制という側面と現実改造という側面ももっていた<sup>24)</sup>。欲望統制とは個人的欲望が、変化する境遇に適合し得るようにそれを統制するということである。王堂は欲望統制に基づいて「徹底個人主義」を提唱する。徹底個人主義とは、

人間の生活に現はれ、そこにはたらいて居るあらゆる事実を認める。然し、其等をして可能ならしめ、特殊の様式を有たしめるところの個性の事実を認めようとするのである。この個性の事実の特徴を理會することに依つて、他のあらゆる事実の特徴を理會しようとするのである<sup>25)</sup>。

徹底個人主義はそれぞれの個性を認めることによって、その理解を広げるということである。プラグマティストのミード (George Herbert Mead, 1863-1931) によれば、原始社会から文明社会への進化は、個人の行動が画一的なものから、より個性的なものへと解放されていく過程である。しかしながら高度に機械化された現代文明社会では、むしろ逆に個人の行動が個性的なものから画一的なものへと変質させられているという<sup>26)</sup>。王堂による個性の強調は、こういった画一的なものへの批判であった。

一方、現実改造とは社会的境遇が、変化する個人的欲望に込め得るように、これを改造していくことを意味する。湛山もこの王堂哲学の側面を一連の文明批評における理論的基礎としている。そして王堂も湛山も、徹底個人主義によって欲望統制と現実改造という相矛盾する二側面のどちらにも偏らず、動的にその均衡を保ち、その統一を図ろうとしている。

王堂は自らの欲望統制と現実改造という側面をもつ人物を日本において見い出そうとする。そして2人の人物に注目する。1人は福沢諭吉 (1835 - 1901、以下は福沢) であり、もう1人が尊徳であった。王堂がこの2人を評価するのは、2人は著作や実際の行動を通じて日本人の思考方法を自由に柔軟にし、それによって日本人の生活を解放していったという点である<sup>27)</sup>。王堂は福沢に関する著書 (『福沢諭吉』、実業之世界社、1915年) を刊行する一方で、尊徳に関する著書も刊行する。尊徳に関する著書は『二宮尊徳の新研究』 (廣文堂書店、1911年) である。この著書は

第一章 ヒューマニスト二宮尊徳	第二章 二宮尊徳の生活観
第三章 二宮尊徳の欲望論	第四章 二宮尊徳の修養説
第五章 二宮尊徳の経綸策	第六章 二宮尊徳の事業

という構成になっている。この著書はその構成からもわかるように尊徳の思想を紹介したものであるが、尊徳の思想の特徴について、王堂が自らの哲学を語るような展開で書かれているので、王堂哲学の輪郭が鮮明に現れている。

以下ではいささか長くなるが、王堂が尊徳をどのように評価したのかを通して、王堂哲学の特徴を考えていく (以下の引用は、とくに断らない限り『二宮尊徳の新研究』からの引用であるので、注記

という形ではなく、末尾にページ数を加えるにとどめた)。

王堂はまず尊徳の思想を評して、

彼れの学説を通じて最も顕著なる特徴をなして居るものは、其れが飽くまでも実験的であり、功利的であり、平民的であったことである (10 ページ)。

という。王堂によれば尊徳は、これらの点でプラグマティズムの立場を体現していた<sup>28)</sup>。王堂は内村鑑三 (1861 - 1930、以下は内村) が『代表的日本人』(警醒社書店、1908 年) のなかで尊徳の誠実や勤勉を称賛しているのに対して、内村の尊徳像は平凡であるとしりぞけ、人間生活中心の思想家としての尊徳に注目すべきだとしている。王堂によれば、生活とは主観的には経験であり、客観的には行動である。そして生活を持続するという実用的な目的をもってはじめて知識も生まれる<sup>29)</sup>。

二宮尊徳は生活を統一する方法として境遇の支配と、欲望の整頓とに等しく意を留むることの必要を説いたのである。(中略) 二宮尊徳は最高最新の意味に於て (今、世上に行はれて居る言葉を用るれば) ヒューマンイズムの人であった。彼れの説くところは多枝多葉であるが、畢竟するに、政治にしても、宗教にしても、学問にしても、総べて其等のものの役目は人間の生活を助長するといふ一事に帰することを忘れない (20 ~ 21 ページ)。

王堂は「ヒューマンイズム」という用語を使って尊徳を表わす。もちろんこれは王堂の人間生活中心の理論を実際に行動に移した人であるという意味である。尊徳は生活を維持するために自然に働きかけ、現実の社会を改造していったのであるという。したがって、

尊徳が到る處説くことを忘れざる労作、分度、推譲、貯蓄、中庸等の諸徳は皆人間が生活を持續する為に天然を変更し、社会を構造するといふ二つの根本事実に向く含蓄され、後に発展した要素に他ならない。天理と人道との関係を最も的確なる言葉を以ていひ表したのは、尠くも東洋にあっては、我が二宮尊徳を以つて嚆矢としなければならぬ (30 ~ 31 ページ)。

「分度」や「推譲」、そして「中庸」などの徳目は、自然に働きかけ社会を形成し、発展をもたらす重要な要素となっている。尊徳が実際の行動で示した分度は、消費に一定の限度を設け、その限度内で生活することを意味し、推譲は分度を守ることによって生まれる余剰を家族だけでなく地域社会にも還元することを意味する。中庸はその分度を確定する際に、一定の目安となる平均を意味する<sup>30)</sup>。王堂によれば、尊徳は分度・推譲・中庸などの要素で天道と人道との関係を表現し、発展図式を描いているという<sup>31)</sup>。後述するが、この図式は、その後の湛山による農業政策論の根本的な理念となっている。

王堂は天道として位置づける自然の法則に逆らっても、あるいは天道に従ったとしても生活が成り立たないという尊徳の独創的な考え方を評価する一方で、この考え方を実行に移したときに、その結果が不明瞭であるとして尊徳を批判している。尊徳による独創的な考え方は、

其の真相を捕へかかりながら、其の推論を必然の帰結まで齎すことをせずして了つた為に、極め

て不徹底にして、不満足なる状態として遺して了つた。其の結果として、彼れの着想は如何にも奇抜であるが、其の帰結は甚だ漠然たるものになつて居る（42 ページ）。

さらに王堂は、

私が此の点に関して十分なる満足を表すことの出来ないのは、彼れが生活の根本原理とした人力を以て天理を征服するといふ思想の意味をなほ一層も二層も拡充せずして途中で止まつて了つたことである（185 ページ）。

という。確かに尊徳による天道と人道という考え方は、当時としては独創的なものであり、西洋近代科学にも通ずるものであった<sup>32)</sup>。しかしながら、なぜ尊徳は徹底して考えを深めなかったのかと王堂は不満を述べる。王堂は、

労作の原理の人力によって自然を征服するにあることを多少なりとも認得した彼れは、何故に在来の方法を墨守することを捨て、更に勝れたる方法を講究し、其れを一般農民に宣伝しなかったのであるか（55 ページ）。

と不満を述べ、尊徳による独創的な考え方が徹底しなかったことによって、新たな農業技術やその普及へと結びつかなかつたと批判する。実際に報徳思想からは目立った農業技術は生まれていない<sup>33)</sup>。

さらに尊徳による農村復興仕法に関しても、人間生活中心の理論を考える王堂にとって、農村復興仕法の目的が希薄にうつる。すなわち、

貯蓄に関する彼れの意見の中で、一層大なる欠陥と思はるゝのは、其れに対する真の目的が全然欠けて居ることである。（中略）窮極の立場よりして、更に一層高き目的がなければならぬ。其れによつて一般に生活の程度を高めるといふことである。（中略）尊徳は生活の常道を説いて居るのであるとすると、も少し深く廣く富の機能と人生の理想との関係を観察しなければなるまい。（中略）更に進んで国家の富貴の目的を其れ以上のあるものに求めなければならない。さうしないで、最後の目的の明確に體認されない中に、尊徳の梅辻を笑ふのは、詰り五十歩を以て百歩を笑ふ如きものである（67～71 ページ）。

という。尊徳は上賀茂神社の社家である梅辻の講演を、梅辻のいうように単に儉約せよというだけでは一國はおろか、一村も復興できないと非難したとされる<sup>34)</sup>。しかしながら王堂によれば、国家を富ませるといふのは、単に経済的な豊かさを求めているのではなく、それ以上の目的がある。尊徳はそれを明らかにしていないので、梅辻の主張と何ら変わりがないという。王堂は富が人間の理想とどのように結びつくのかをよくみなければならないという<sup>35)</sup>。

王堂によれば、

生活は現代の言葉を用るれば価値の判断と選択とに他ならない（94 ページ）。

尊徳はこの生活の指針を中庸という言葉で表わしているという。

尊徳が従来の伝説や教権に反対して、此の如く中庸を容易きものと見たのは、彼れが如何なる場



合にあつても事実に着し、現実を重んずる結果である。(中略) 尊徳が中庸を容易いとするのは、多くの人が多くの場合に生活して居つた方針を採つて、其れを中庸と見なしたからである(100ページ)。

しかし、

尊徳は中庸といふことをたゞに消極的方法によつてのみ得られるものと誤解した結果、健全なる生活に必要な一つの要素を全然無視して居る。或は其れを排斥して居る。其れは冒険の要素である。(中略) 冒険とは是まであつたよりも、一層充実した生活を開かんがために、多大の犠牲を払つて試みられる斬新なる事業のことである(102ページ)。

王堂によれば、中庸は健全で充実した生活をめざして積極的に生かされるものである。しかしながら尊徳は消極的な方法をとって中庸を守ろうとしたために、新たな行動をとれなくなっている。尊徳は実際には中庸を平均という概念でとらえ、農村復興仕法に生かしていた<sup>36)</sup>。しかしながら、王堂は充実した生活をめざすのであれば、新たな農業技術や目新しい事業を展開していかなければならないと考えるので、尊徳の農村復興仕法の過程で、それらが生まれなかったことに不満をもっている。

王堂は尊徳の人道を評価しているが、悟道には問題があるという。

人道は差別相を根本事実として出立し、悟道は平等界を根本事実として出立するのでであると尊徳は観じたのである(106ページ)。

王堂は一般的に固定的・実体的に考えられていた時代にあつて、相対主義的認識に立脚している尊徳の先進性を評価していた。たとえば尊徳による、

善悪の論甚だむづかし、本来を論ずれば、善も無し悪もなし、善と云て分つ故に、悪と云物出来るなり、元人身の私より成れる物にて、人道上の物なり、故に人なければ善悪なし、人ありて後に善悪はある也<sup>37)</sup>。

という善悪についての相対主義的認識を称賛していた<sup>38)</sup>。しかしながら尊徳の悟道は、

人間に福祉を来すところのものは、事実を基礎とする統一的原理を精神とする相対主義でなければならぬ。人道は是れであるのに、悟道は経験を超越する発生的説明を精神として居る絶対主義である(112ページ)。

と批判して、尊徳の悟道は相対主義でなく絶対主義であるという。王堂は悟道というのは欲望を整齊することなく排斥し、生活を肯定せずして卑下するものと考えていたからである。

これに続けて王堂は、

尊徳が人間を福祉に導く一大福音として人道を創設しながら、なほ其れを害することがあると彼れが信じて居る悟道の真理を認めやうとするのは、彼れの見解の徹底して居らなかつた結果である(115ページ)。

と述べ、尊徳は相対主義的認識を徹底していなかつたとする。王堂は「この世の中には唯一種の実在

しかない、それは作用である」という。王堂の哲学は、認識の対象も、その価値も意味も元来は不定であり、ある人の目的または欲求に依ってはじめて、またその時に限って定まるという作用主義の立場を取っていた。王堂によれば尊徳は相対主義的認識を徹底していないが、そうであるからといって、作用主義的な考え方が尊徳にないとはいえない。尊徳は、

遠近は己が居處先定りて後に遠近ある也、居處定らざれば遠近必なし、大坂遠しといはゞ、関東の人なるべし、関東遠しといはゞ、上方の人なるべし、禍福吉凶是非得失皆是に同じ、禍福も一つなり、善悪も一つなり、得失も一つ也、元一つなる物の半を善とすれば、其半は必ず悪也<sup>39)</sup>。

という。尊徳は万物が時々刻々と変化しているので、これに柔軟に対応していくと同時に、その対応を可能とする強靱な主体性が必要であると説く。この点において王堂は尊徳をもっとも評価している。このような考え方は、後述する湛山の政治経済思想や農業政策論に反映されていく。

王堂は尊徳の悟道に対して批判的であるが、尊徳の個人主義および理想主義については大いに評価している。

如何に彼れは、充実せる理想主義を抱き、同時に聡明なる個人主義を有つて居つたかを示さうと思ふ (140 ページ)。

尊徳の個人主義については、

古来の志士、仁人の説いたところの最も大なる、且つ最も深き個人主義であつた (145 ページ)。  
という。王堂は『徹底個人主義』(天佑社、1918年)という著書を執筆しているが、そのなかで展開される個人主義について、日本人のなかでは尊徳が最もよく体现しているという。

もう一方の理想主義については、王堂は自らを実験理想主義者であつてプラグマティストではないと語っている。王堂は実用を重んずるプラグマティズムには、明らかに理想の要素が欠けていると考えている。王堂によれば、プラグマティズムはあらゆる経験を志向的にみようとするのであつて、決して実用的にみようとしない<sup>40)</sup>。このあらゆる経験を志向的にみよとするのは、王堂が日本的プラグマティズムに託した点であつた。

理想主義といつても現実を離れて理想を求めるものではない。たゞ実在の意義を其の動力の方面より見て、其れを日夜孜々として怠らず改善して行かうといふのである。此の意味に於て、尊徳は真正に理想主義のひとであつたのである (150 ページ)。

尊徳の理想主義は現実からかけ離れて成り立つものではない。むしろ現実には密着して形成されたものである。この点で日本的プラグマティズムとも言い換えられる実用主義である。この実用主義も湛山によって継承される。たとえば、明治維新以後の女性の理想とされた良妻賢母主義は、湛山によれば過渡期の産物にすぎず、不徹底な実用主義であり、現実にとつた有効な主義ではないという<sup>41)</sup>。

尊徳の理想主義は現実から離れたものではない。しかしながら王堂によれば、尊徳の思想はその実際的な活動に特徴があるとはいえないのである。王堂は以下のように述べる。

私は二宮尊徳の社会政策が、現に少数の帰依者を得、保守的の傾向を有つたのを見て、尊徳の道徳と経済とを調和しようとした政策に大なる缺陷の潜むのを知るものである（172 ページ）。

さらに、

私から見ると、彼れの卓絶せる才能は寧ろ彼れの学説の方面にあるのであつて、事業の方面にあるのではない（208 ページ）。

という。王堂は尊徳を実際の社会改良家ではなく、哲学者として評価する<sup>42)</sup>。王堂は実利的社会改良家としての尊徳ではなく、個人主義と実験的理想主義の思想家としての尊徳に着目している<sup>43)</sup>。

哲学者としての彼れの人生観は驚嘆に値するほど深酷にして大膽なるものであるが、社会改良家としての彼れの政策は穩健であろうが、極めて平凡なものである。（中略）彼れの理論と実行とに大なる矛盾がある。前者は其の精神に於て厭くまで積極的であり、進取的であるに反して、後者は極めて消極的であり、退嬰的である（209～210 ページ）。

王堂は尊徳の理論と実行には矛盾があるとまで述べて、その違いを強調する。もちろん、この違いは王堂の特徴的な認識方法である相対主義的認識に基づくものである。

王堂は著書の最後で、尊徳を日本的プラグマティズムの人物として評価して、以下のように結んでいる。

二宮尊徳は、古来世上に出現したあらゆる哲人と等しく、少くとも其の事業の志向と理想に於ては、矢張実験主義と個人主義とを持した人であつて、其れが彼れの主張の中で永久に互つて最も価値あり、光輝あり、生命ある部分である（214 ページ）。

王堂は日本的プラグマティズムを尊徳に見出し、そのなかに自分の学説を投影させた。そして王堂によって尊徳に投影された日本的プラグマティズムは湛山へと継承される<sup>44)</sup>。湛山による生活の概念、そして個人主義や自由主義は、王堂によって表現された尊徳の報徳思想にみることができる。湛山のいう生活とは人間の営む現実の社会生活であり、湛山の求める「自我」（欲望）の実現も、この現実の社会生活を通じてしか実現できない自我である。湛山による個人主義や自由主義においては、社会的要素が重視される。したがって湛山の個人主義も自己を本位にして自我から出発しながら、社会的要素の存在を重視し、社会の共同生活を通じて相対的自我実現を求めようとするものであった。欲望統制の個人主義から出発した湛山は、やがて現実改造論の基本的な枠組みを形成するに至るのである<sup>45)</sup>。

### 3 小日本主義と農業

湛山は、田中王堂『ヒューマニスト二宮尊徳』（関書院、1948年、第二次世界大戦後に『二宮尊徳の新研究』の復刻版として刊行）の序文において、以下のように述べている。

王堂先生が詳細に本書に論じた通り、二宮尊徳は日本に於て古来會て類例のない徹底せる自由思

想家であつた。(中略)此の著の真の特色は何かとただせば、尊徳の思想の批判に托して、王堂哲学そのものを展開したことにあると言へよう<sup>46)</sup>。

湛山の言論に王堂の影響が強くみられるとすれば、当然、この著書も湛山に影響を与えたと考えられる。湛山は自他共に認める王堂の弟子であり、王堂哲学の継承者であり実践者であった。もっとも湛山自身も尊徳の報徳思想には関心をもち、

幾度も手にした本ではあるが、近頃又機会があつて二宮尊徳の語録『二宮翁夜話』を拾ひ読みして、彼の思想の如何にも自由なのに改めて感服した<sup>47)</sup>。

と語っている。関心をもったきっかけは王堂の影響であることはまちがいないが、報徳思想に関しては王堂からの単なる受け売りにとどまるものではない。

湛山の言説のなかで、一般的に高い評価を得ているのは「小日本主義的植民地放棄論」である。小日本主義は湛山が終生もち続けた思想であった<sup>48)</sup>。湛山のいう小日本主義を端的に言えば、わが国は人口が多くて貧乏であるという大日本主義(海外膨張主義ないし帝国主義)に対して、労働力の活用によって国民生産性の向上をもたらし、それが平和的貿易の増大(国富の増大)を導くという国内市場の内発的な発展図式に国民経済の活路を求める経済理論であるとされる。しかしながら小日本主義論が湛山の経済理論であるとされているにもかかわらず、従来までの小日本主義に関する研究成果の多くは、植民地放棄論がもっぱら強調され、外交論に偏っていた観があり、経済的視点や哲学思想面からの考察が不十分であった<sup>49)</sup>。

湛山の小日本主義は王堂のプラグマティズムの影響を受けたものである。というのは小日本主義が湛山のいう欲望統制あるいはレセ・フェール(自由放任)の克服をめざした哲学思想に基づくものであり、さらに国際経済面においては国家的欲望に対する自律的あるいは他律的な統制を意味するものであったからである。しかしわが国では欲望統制し、自律的ないし他律的な統制に基づいて国家運営をすべきであるという考え方は湛山に始まるものではない。すでに明治中期において自由民権論者のなかに小国思想がみられ、さらに日露戦争直前にも社会主義者による小日本論がみられ、内村による小国主義論もあった。しかしながら、これらの小日本論や小国主義論の多くは政治的な意味合いが強く、経済的な論拠に基づくものではなかった。湛山は小日本主義を主に『東洋経済新報』<sup>50)</sup>誌において展開したが、そこでみられる小日本主義は、それまでの小日本論あるいは小国主義論とは異なり、功利的で経済合理主義的な特徴をもつものであった<sup>51)</sup>。

厳密に言えば、湛山は「小日本」という用語を使っているものの、「小日本主義」という用語は使っていない。しかしながら、もちろん湛山のそれは単なる小国論ではない。それまでの日本における議論の経緯からすれば、大国に対置される小国論と、湛山が説く小国主義論とは明らかに異なる<sup>52)</sup>。湛山は国家規模における小日本を主張しているわけではなく、考え方としての小日本主義を主張している。湛山による小日本主義論の特徴は主に3つある<sup>53)</sup>。第1は自由貿易主義と商工立国主義を根

拠にしている点である。帝国主義（湛山によれば、主として植民地と特殊権益の獲得をめざした武断的な対外膨張政策）にみられる狭小な国土、わずかな資源、過剰な人口という見解とは対極をなしている。第2は国家という枠組みにとらわれることなく、グローバルな視点をもっている点である。これはソビエト連邦に対しても一貫して持ち続けた視点であり、この視点から湛山はソビエト連邦との国交回復と貿易関係の進展を主張していた。戦後もこの視点に変わりはなく、前述のように石橋・周共同宣言を出して日中友好をいち早く訴えている。第3は利益や効果を重視する功利的な方法論をとっている点である。湛山の主張は全体的に道義的な色彩が薄く、徹底的な功利主義に基づいたものとなっている。もっとも湛山の場合には、功利主義が往々にして陥りがちとなる自己本位となってしまうことはなく、その延長上にある帝国主義に陥ることもない。なぜなら湛山の自己本位は、いわば極端な個人主義というのではなく、

私の利益を根本とすれば、自然相手の利益も図らねばならぬことになる、相手の感情も尊重せねばならぬことになる<sup>54)</sup>。

からである。湛山によれば自己あるいは自国の利益は、他人あるいは他国の利益を無視しては成り立たないのである。

湛山によるこの小日本主義論がより具体的な形となって現れるのが、農業問題に対する改革構想である<sup>55)</sup>。湛山が手がけた最初の経済評論は、米問題に関する評論であった。それは米価安定の工夫から始まり、米穀専売の主張を経て農業体制の改革構想に至る。この過程は湛山のこれまでの思想をそのまま現実の農業問題へと結びつけたものである。さらに湛山の農業体制の改革構想は、無用な農業保護を撤廃することと、人間が効率的に働くことを中心に練られている。そのために人間が働くための環境形成、これは湛山によれば地方自治体の行財政改革ならびに教育改革といったことになるが、この環境形成も農業問題に関連する。湛山による農業論は、農業保護に固執するのではなく、小日本主義論の特徴をより具体化させることによって、農業保護の非効率性と行財政改革や教育改革を説くものであった。

ところで明治期から大正期にかけて米価は需給関係の変化で激しい価格変動を繰り返し、農業問題を深刻化させていた。これに対して政府は1915（大正4）年に米価調節調査会を発足させる。この調査会は応急調節案を出して、高米価を維持することによって米作を保護しようとした。湛山はこれを批判し、外米の自由輸入、外米の食用奨励によって低米価を維持することを主張した<sup>56)</sup>。この主張の背景には農業保護政策の撤廃と自由貿易論に立脚する商工業立国という考え方があった。しかしながら湛山はもちろん、これによって国内農業の縮小を説いているのではない。農業保護政策が農業発展にとってむしろ障害となっているので、それに替わる農業政策の必要性を訴えているのである。

その後、湛山による外米輸入とその食用奨励の主張は、政府による米価管理政策が無力化するのにもない、さらに米価自体が社会問題化するにつれて、米専売制の主張へと変わっていく。しかしこ

これは湛山の主張が根本的に変わっていったことを意味するものではない。湛山の主張は自由貿易論に立脚しているという点において、まったく変わっていない。湛山が米専売制の主張をしたのは、政府が米の投機を防いで米価を安定させるために、暴利取締令の公布（1917年）や米穀取引所の休業命令（1918年）という手段をとって積極的な市場干渉を行なったことに端を発している。湛山は米価問題の原因は流通業者の投機的な行為ではなく、基本的に需給関係の不均衡にあるとして、政府による市場への干渉を乱暴な処置と批判する。湛山は政府による市場干渉を非難する一方で、米の需給関係を安定的に保つためには自由取引に委ねるべきではないという立場を取る。湛山によれば安定的な需給関係を維持するには、米の流通は政府または地方自治体の監督下におくべきであるという。

湛山は具体的に全国一系統の官営穀物倉庫の設立、穀物輸出入の官営、最高（上限）価格の制定という3項目の解決案を示している<sup>57)</sup>。湛山はこの3項目を出発点にして米専売制の構想を練っていく。米専売制は一見すると、これまでの湛山による自由主義論と矛盾するようにみえる。しかし湛山は米専売制は自由主義論を崩すようなものではなく、むしろ公平な分配の実現や社会福祉の充実といった新自由主義の精神に根ざすものであるという。湛山によれば、農業問題は米問題だけでなく、国民性問題、生活問題、家族制問題、高等遊民問題なども関連があるとされ、それらの多くは社会問題化しているという。それに対して「充実したる生活」とか「自己の実現」とかいうだけでは、もう役に立たなくなっている。どのようにして生活を充実させるか、どのようにして自己を実現させるかという具体的な問題解決が必要になっている<sup>58)</sup>。この米専売制も社会問題に対して公平な分配をもたらす社会福祉を実現するための具体的な施策であるという。

湛山による米専売構想が実現に向けて動き出すきっかけとなるのは、1918（大正7）年の米騒動であった。湛山は米の生産・流通・価格を統一的に管理できる専売制の実現をめざして、1919（大正8）年に米穀専売研究会を創設して、専売法の研究を始めている<sup>59)</sup>。しかし当時は専売制の導入は実現が困難であるとして、ごく少数の意見にしかすぎず、1921（大正10）年には政府はそれまでの政策と同様、米価のみに焦点をあてて管理しようとする常平倉の設立を旨とする米穀法を閣議で決定する<sup>60)</sup>。これに対して湛山は、米穀法は市場をいたずらに混乱させるだけであり、政府の干渉によって米価を吊り上げてしまう農民保護法となる可能性があるとして批判する<sup>61)</sup>。米穀法とは逆に湛山のいう米専売制は、安価な外米の輸入を奨励することによって、高価な国産米の生産規模を外米との競争可能な水準まで縮小することを目的としていた。

湛山の考える米専売制の基本にあるのは、労働力も含む資源の合理的な運用の原則に基づいて、農業保護主義を打破することであった。しかしながら、湛山の専売制は国産米の生産規模の縮小をもたらす可能性もあるので、単に農業立国から商工立国への移行を促しているものにはすぎないことになる。したがって湛山の米専売制の導入には、農業構造に関する明確な指針がともなわなければならない。それがなければ、国内農業を縮小してしまう危険性をもっているからである。そこで湛山が自

らの構想を実現しようとするれば、国内農業再建策とでもいうべきものの提示が必要となる。

湛山の国内農業再建策の構想は、『東洋経済新報』誌（1922（大正11）年6月10日）の社説「農業政策の改革」に始まる。そこでは現行の米本位の農業政策は農業だけでなく農業以外の産業の発展を阻害していると批判している<sup>62)</sup>。工業化の進展とともに、農業構造を展望しようとする場合には、農業以外の他産業との関連を考えなければならない。湛山は1924（大正13）年頃から農業のみでなく、農業に関連する広範な経済社会問題を対象に議論を展開している。たとえば小作争議問題や米問題をはじめとして、教育および地方自治・行政改革問題などの諸問題である。湛山はこれらの問題に対して、自然資源の不足という日本が負っている不利な条件を克服すべく人間の能力を活かすことを中心とする発展方針を策定するように提唱する。まさに王堂が語ったヒューマンイズムの具体化であるといえる。

湛山は農業分野においては従来の米本位の農業政策ではなく、人間の能力を活かすような政策の立案をめざすべきであると語る。湛山は各種の論評を通じて、農業の大規模化、多角的発展、農村の工業化を骨子とする新農業政策を構想していく。そして大正末期に『東洋経済新報』に発表された農業問題に関する論文をまとめて『新農業政策の提唱』（東洋経済新報社、1927年）を刊行する。ここにおいて報徳思想の評価を通じて王堂が形成した哲学に基づく農業政策が策定されることになる。

この著書が刊行された当時（大正末期から昭和初期）の経済状況は、重化学工業が本格的に発達しはじめ、農業と工業の発展が不均衡となり、農業が構造的危機に直面していた<sup>63)</sup>。農業政策では依然として地主制を背景とする補助金政策や保護政策がとられていたものの、小作問題に対して新たに小作調停法と自作農創設維持の方向が打ち出され、さらに前述のような米穀管理も始められていた<sup>64)</sup>。しかし、このような新たな農業政策への取り組みがあったものの、基本的には米麦中心の農業が行き詰まり状態にあった。このため農業悲観論や農業危機の論調が数多く現れていた<sup>65)</sup>。これに対して湛山の説く新農業政策は単なる悲観論や危機の警鐘ではなく、むしろ農業を積極的に評価していこうとするものであった。この点で当時としては独創的なものであったといえる。

湛山は『新農業政策の提唱』の第1章で農村振興策の概略として、これまでの論点を5点にまとめている（以下の『新農業政策の提唱』からの引用部分は、注記ではなく、末尾にページ数を加えるにとどめた<sup>66)</sup>）。1点目は、農業のみを保護する政策は他産業の進展を妨げ、農産物の高価格政策は農村振興にとって逆効果となっている。したがって湛山は当時実施された農業低利資金の投入や自作農創設維持に反対する。2点目は、米作本位では農村の収入は増加しないので、畦畔の雑草を利用して牛の飼育をするなど「廃物」利用を考えるべきである。3点目は、農業は商品生産に支配されて、販売目的で生産しているので、失敗している場合が多い。湛山はそれを「倒行逆施の産業奨励」と名付けているが、農家はまず自家消費から生産を考え、徐々に販売へと拡大していくべきであるとする。4点目は、地方における知識の充実と普及である。農村における知識の欠乏を補うためには、市町村

の権限を大きくするという地方制度の変更と、地方の農学校や農事試験場の改良が望まれる。これがなければ農業低利資金や自作農創設維持という政策は農村振興へと結びつかない。5点目は、農業が将来性のある産業であることを示して、農村に「希望の光」を輝かせることが必要であるということである。

湛山は当時の農業観に支えられた農業保護を批判して、

日本の農業はとても産業として自立できない、故に農業には保護関税を要する。低利資金の供給を要する、国家の力で自作農の創定を要する。政府も、議会も、帝国農会も、学者も、新聞記者も、実際家も、口を開けば皆農業の悲観すべきを説き、事を行えば皆農業が産業として算盤に合わざるものなるを出発点とする。斯くて我農業者は、天下のあらゆる識者と機関とから、お前等は独り歩きは出来ぬぞと奮発心を打ちくだかれ、農業は馬鹿馬鹿しい仕事ぞと、希望の光を消し去られた。今日の我農業の沈滞し切った根本の原因は是に在る（317 ページ）。

として、当時の農業観を批判する。そして希望の光を消したことが農村から知識を奪うことになり、さらに経営採算性のとれない産業だということで農業から資本も奪ったと非難する。

湛山は当時の農業振興策をふまえて、自らの農業観を語る。湛山は基本的に農業に対して2つの考え方をもっている。その1つは自然資源よりも人間の能力を重視していくという点であり、もう1つは農業利潤が低率ではないという点である。第1の点について、湛山は日本経済不況の原因が自然資源の不足にあるという一般的な認識に対して、次のように語る。

私を以て見るに、我国は如何にも貧乏に相違ない。併し乍らそれは所謂天恵が足りぬからではなくして、人工が足りぬからである。何となれば富源は皮相に観察すれば自然物の如きも、実は人工を以て作るものであるからである（359 ページ）。

湛山は農業振興策を説く場合に、この人工の重要性を訴えている。人工は人間の作為全般のことであるが、人工は農業者や地方自治体の創意といったものによって導かれるとする。

殊に個人乃至地方自治体の創意の發揮が新農業政策の最も大切なる精神（309 ページ）。

であるとして、湛山は新農業政策の実現において重要なことは人心の作興であると考えた。この点で天恵貧乏や人口過剰などの悲観論は、農業者の奮発心を失わせたと批判している。

湛山は個人や地方自治体の創意が農業政策にとって必要であると説いているので、農業振興策の前提として地方振興策も考慮に入れなければならないと考えている。「個人乃地方自治体の創意」を養成する手段は、教育面においては知識の普及と個人独立心の培養である。それとともに制度面においては市町村に地方税権・行政指導権を与える「地方分権」という地方自治体の行財政改革であることを唱えている（375～96 ページ）。

第2の点である農業利潤は低率ではないという主張には湛山の意思が込められている。それは農業者に自信をもたせるということと国家からの保護を止めるということである。湛山は地主の土地貸借



収益が公債よりも利回りが高いだけでなく、年平均約1割以上の自然増価があると指摘する<sup>67)</sup>。これに対して地主利潤と耕作利潤との混同があるという批判があるが、湛山は混同しているわけではなく、むしろわが国の農業政策が地主即農業という前提で考えられたものであるので、あえて農業地主及耕作者の利潤と考えていると応えている。湛山の考える農業利潤とは、表-1の差引剰余のことである。しかしながら当時の農業利潤の考え方は、表-2のように差引農業所得から労働賃金を引いたものであるとされていた。湛山はこの一般論に対して、差引農業所得に農業以外純所得を加えて、そこから家計費を引いたものであるという。農業以外所得は、現在でいう農外所得ではなく、農業に関連する仕事に従事した場合に得られる所得を想定している（湛山によれば、農務局の統計が不明瞭であるため判然としないという）。

表-1 大正末期の農業利潤（湛山の場合）

	差引剰余	家計費	農業以外純所得	差引農業所得	農業経営費	農業総収益	
自作	六〇七	七七七	一、三八三	一、〇五八	五九	一、五七〇円	自作
自小作	五二九	七七七	一、二九五	一、〇〇三	七九〇	一、七九三円	自小作
小作	一六五	七七七	九四二	六八二	七四一	一、四三三円	小作
平均	四三三	七七七	一、一九九	九〇七	七一	一、六八八円	平均

（備考）自作農及小作農の家計費は小作農なみとして  
 改算す。差引の内容と合致せざるは円位以下四捨五入の爲めである。

資料：石橋湛山『新農業政策の提唱』（石橋湛山全集編纂委員会編『石橋湛山全集』、第5巻、東洋経済新報社、1971年、338ページ）。

表-2 大正末期の農業利潤（日本勧業銀行の場合）

農業利潤	労働賃金	差引農業所得	
四三三	六四五	一、〇五八円	自作
三三九	六七四	一、〇三三円	自小作
五五	六二七	六八二円	小作
二四一	六六六	九〇七円	平均

資料：石橋湛山『新農業政策の提唱』（石橋湛山全集編纂委員会編『石橋湛山全集』、第5巻、東洋経済新報社、1971年、338ページ）。

しかしながら兼業先から得られた農外所得を除外するのは無理があるという。なぜなら、

我国の普通農家の農業経営なるものは、事業だけを全く切離して経営する会社や銀行とは異り、家族の生活即農業経営、農業経営即家族の生活である。農家に、其一家の生計と事業としての農業取支とを切り離して計算させることは、余程の無理をせねば出来難い（340 ページ）。

からであるという。農家はこのような状況にあるので、推定賃金額などで計算することは農業の実情から離れてしまうことになる（湛山は区別のないものをわざわざ区別しても、数字によって正確さを期したつもりになっているだけであって、結局、農家の実態はわからないという）。これは湛山が農家所得総計から家計費を差引いて剰余金を算出した理由でもあった。

湛山は農業従事者（自作も小作も含める）の収益率について、自らの計算法（投資資本に地価と家計費を除き、収入には地価の自然増殖を組み入れる）によって高率であることを示す。この点からも湛山は農業が決して低利潤ではないことを説明する。

しかし、わが国の農業政策は農業低利潤論に基づいている。

農業低利潤論者は、一方に斯く資本と人材とを農業から追い出す宣伝をやりながら、他方では政府の保護で農業に低利資金を輸入する運動をした。そして彼等は成功した。が其の結果は何うなったか。目的は大いに之で農業を繁栄せしむる筈であったが、事実は全然予期を裏切った（353 ページ）。

湛山は農業低利潤論が農業から資本と人材とを追い出していると同時に、農業そのものの改良を妨げていると説く。湛山は農業政策が農業低利潤論に基づいている以上、成果を得ることは困難であることを繰り返し述べている。

さらに農家の生活についても、苦しいとか惨めであるという一般的な認識とは異なっていた。湛山は農村での生活は都市労働者のそれと比べて決して悪くないと述べる。湛山は単に財の生産や分配という視点だけから経済をみていない。湛山は人間らしく生きる生活全体という視点から経済をみようとしている。この生活とは、前述の王堂が尊徳の中庸を引き合いに出して説明した生活のことである。湛山が農業や経済について語る場合、この生活という基準がよく出されるが、王堂の影響が色濃く反映されていた。

湛山は一般的に流布している農業悲観論の通説に反対して、農業には将来性があることを論証しようとした。湛山は『新農業政策の提唱』において、勸業銀行や帝国農会などの統計資料を分析し直している。その結果、一般的な分析者の説明とは逆に、農業利潤は低いということはなく、農民の所得や生活水準も決して低くないと語っている。農業は独自の産業分野として、むしろ向上する可能性をもっていると説明する。湛山によれば、前述のように米だけに固執する単一経営ではなく、有畜農業や果樹・蔬菜農業などを組み合わせる複合経営を展開して、農家が経営体として革新を行っていけば、農業は人材を吸収できる有望な産業へと成長できる。そしてこのような農業構想から考えれ

ば、農業低利資金の投入や自作農創設あるいは政府による農地の買上げという政策は結局、地価をつり上げることになってしまい、それによって地主に恩恵をもたらしているだけであると批判する。

現今の農業政策は、農業非低利潤の楽観主義に基調を置き、経済的農業の確立を目的とせねばならぬ (356 ページ)。

と湛山は提言し、その具体策は 2 つあり、

第一は不合理な地価の騰貴を抑制し、乃至現在既に不合理な高価の地価の引下を策す事、第二は農業の経営効率を増進する事、就中労力の適切なる分配を図る事、である (356 ~ 7 ページ)。

湛山の農業政策論は、地主制を前提にしているものの、土地所有権よりも農民の耕作権 (土地利用権) を重視する傾向にある。湛山は地主制を前提としているだけであって、地主制を積極的に肯定しているわけではない。むしろ地主は生産の担い手として歴史的な使命を終えたとして、その消滅さえ予言している<sup>68)</sup>。さらに土地利用を推進していくにあたって、米麦中心の農業に結びつく偏狭な国産奨励イデオロギーは、結局、単に地主制を維持するだけにすぎないと批判する。湛山は偏狭な国産奨励に代わって国際的分業を視野に入れた産業奨励を説く。そしてこの産業奨励には必要な前提が 2 つあるという。1 つは軍国主義の打破であり、もう 1 つは地方自治の発達である。

軍国主義に関して湛山は、

此軍国主義の爲めに、我国は隣邦から疑われ、例えば支那と産業上に於て十分の提携が出来ない。支那は実に我国産品の大市场で、又我原料供給の大豊庫だ。之と手を握り得なくては、我国の産業は駄目だ。国産奨励論者は宜しく是に着目し、軍国主義打破に先ず全力を注ぐ価値がある (367 ページ)。

と主張する。軍国主義によって活発な貿易が阻まれ、産業奨励にとって大きな障害になっているという<sup>69)</sup>。

もう 1 つの地方自治について、湛山は農業をはじめとする地方産業全般の沈滞の大きな原因を、地方自治の衰退にみている。湛山が考える地方自治発達の具体策は、地租や営業税の移譲による地方財政の自立、国庫補助による地方の中央への従属の全廃、府県の廃止による自治権の市町村および市町村連合体への移託である<sup>70)</sup>。湛山は地方産業の発展が地域活性化につながると考えているが、これらの具体的な提案は、戦後になってしばしば議論されることになる地方分権論のさきがけとなっている<sup>71)</sup>。

湛山はこのような考え方に基づいて、戦後の農地改革も批判している。農地改革は旧地主の経済的ないし政治的勢力を駆逐することにおいてすばらしい成果をおさめたけれども、農家 1 戸当たりの平均耕地面積が小さく、零細な農業を固定化してしまつたと批判する<sup>72)</sup>。湛山は零細な農業では、農家が人間らしい生活を送ることができないと語る。大規模化するには農家を減らすという改革を実行する必要があり、そこで余る労働力は工業へ振り向けるような対策を実施しなければならないと説い

ている。したがって湛山によれば、日本の農業改革は工業の拡大発展をともなっていなければならなかった<sup>73)</sup>。

わが国では高度経済成長などによって工業の拡大発展があり、1961（昭和36）年に農業基本法を制定して農業経営の大規模化をめざしたが、実際には通勤兼業という形態が増加して、農家戸数の減少や農地の流動化が進まず、湛山のいう農業改革は実現しなかった。この点に湛山のいう農業改革の限界があったともいえる。もっとも通勤兼業化の定着によって農家所得（農業所得に農外所得を加えたもの）は増加し、農家および農業の存続は兼業先である地方産業の盛衰に大きく依存することになる。言い換えれば、農家が通勤兼業先を確保できれば、農業はむしろ存続する可能性をもつことになる。この点で、湛山のいう人間らしい生活を送るには、現在の日本では農業自体よりも地方産業の振興が必要になっている。したがって、湛山の描いた図式と実際の展開では脈絡が異なっているものの、地方自治の発達による地方産業の振興を説いた湛山の主張は、決して的外れなものではなかったといえる。

結局、湛山の『新農業政策の提唱』における提言は、農業のみを対象にするものでなく、極端にいえば、農業に関連するものすべてを対象にするという広がりをもっていた。『新農業政策の提唱』は一見すると農業に限定された著書のようにみえるが、そこには湛山の「人間の学としての政治経済学」という姿勢がよく現れている<sup>74)</sup>。姜克實『石橋湛山—自由主義の背骨』（丸善ライブラリー、1994年）によれば、

湛山の新農業政策の実質は、農業保護主義、米作本位主義を否定した農村活性論であり、人間・地方自治体の創意を最大限に引き出そうとする「人中心」の、内向的な生産力発展論であった<sup>75)</sup>。

という。湛山の農業政策論は農業だけを対象としたものではなく、人間を中心に考える経済論であった。

そして以上のような湛山の農業政策論には、王堂による日本的プラグマティズムの影響が強くみられる。前述のように王堂は尊徳の報徳思想を評価し、日本におけるプラグマティズムの現れであるかのようにとらえている。もしそうであるとすれば、湛山の農業政策論こそ、報徳思想が具現化されたものとも考えることもできるであろう。戦後であるが、湛山は、

二宮翁も進歩的思想家でありながら、きわめて実行的であった。私は、そういう思想家が今日のわが国にほしいのである<sup>76)</sup>。

と語っている。湛山は自らの農業政策論が実施に移されることを願ったのかもしれない。これまで湛山も王堂哲学の場合と同様、正統ではない異端として扱われる場合が多かった。したがって、その農業政策論が実際の農業政策で実施されることはなかった。その一方で日本の農業は湛山の予想とは異なる方向をとっていった。しかしながら、湛山が『新農業政策の提唱』で示した論点は、現代社会に

においても解決をみていない本質的な問題を提示している。

#### 4 日本のプラグマティズムと政策理念

一般的に思想とよばれるものは、その思想の盛衰はともかくとして、後世に何らかの形で継承されるとすれば、その核心的な部分は運動や学派という形態で継承されていると考えられる。しかし、実際に個々の思想の展開をみると、そのような展開をしている思想は意外と少ない。運動や学派という場合でも、そのきっかけは人と人との運命的な出会いであった場合が多いようである。尊徳から王堂へ、そして湛山へと伝えられた思想は、まさに運動や学派を形成することなく、運命的ともいえる出会いを通して伝えられていった。しかもこの思想は単に伝えられたというのではなく、徐々に形づくられていった。

湛山は自他共に認める王堂の徒であった。その王堂はわが国最初のプラグマティズムの哲学者として、ジュームズ、デューイなどの思想や学説を紹介した。しかし王堂は単なる紹介者というわけではなかった。日本土着ともいえるプラグマティズムを尊徳のなかに見出し、また日本の現実のなかに自己の哲学的課題を探し、それを追求していった。王堂も湛山も自分自身の哲学や思想を形成していった。そこには当然ながら欧米思想の、とくにプラグマティズムの影響が強くみられるが、いずれも単なる祖述や再解釈にとどまるものではなかった。

もちろん王堂や湛山にはアメリカのプラグマティズムが正確に伝えられていたのかどうかという問題が残っている。一般的に日本におけるプラグマティズムに関する多くの翻訳は、アメリカの思想的背景を理解しないままに行なわれるという傾向にあった（あるいはプラグマティズム自体が難解であった）ので、意味不明の部分が多いといわれている<sup>77)</sup>。王堂がプラグマティズムを故意に婉曲したとは考えられないが、プラグマティズム哲学の継承という点からみれば、王堂による受容の際の正確さという問題、そして王堂から湛山への継承の際の厳密性という問題は依然として残ったままである<sup>78)</sup>。

しかしながら、たとえ王堂によるプラグマティズムに関する解釈が正確さを欠くとしても、少なくとも王堂や湛山はプラグマティズムを日本の思想的伝統に照らして再構築したということはいえる。王堂による尊徳観を継承した早稲田大学教授の服部辨之助（1904 - 1981）は、その著書において、

現に私は王堂によって尊徳を発見したのではなく、尊徳によって王堂を発見したのである<sup>79)</sup>。とさえ語っている。尊徳の思想は王堂によって評価されることによって、尊徳から王堂へ、そして湛山へという報徳思想の底流がつくられ、その過程で日本的ともいえるプラグマティズムが形成されていった<sup>80)</sup>。

これは湛山の政治経済思想のなかに尊徳が行なった農村復興仕法が投影されていることでも明白である。尊徳によって行なわれた領主の支出に限度を課す「分度」は、湛山の国内市場論に投影されて

いる。湛山の国内市場論は社会的分業の深化による生産諸力の開放を企図した国内市場論である。ケインズが展開した国内均衡優先論は、湛山によって日本資本主義の構造的矛盾に対する批判的見解を生み出す国内市場論に深化したといえる<sup>81)</sup>。このような国内市場論はその根底に農業論を含んでいなければならない。湛山はまさに著書『新農業政策の提唱』において、この議論を展開したのである。言い換えれば、湛山は尊徳の思惟方法のなかに現実に即した創造的知性を見出し、自らそれを生かしていったといえる。この点で湛山の農業政策の理念は王堂によって形成された日本的プラグマティズムであった。この日本的プラグマティズムは報徳思想を評価することによって生まれたものであることはいうまでもない。

一方、これを報徳思想の側からみれば、報徳思想は王堂や湛山によるプラグマティズムの再構築を後押しした。いささか極端かもしれないが、報徳思想がなければ、王堂や湛山によるプラグマティズムの再構築はなかったといえなくもない。この点で報徳思想は欧米思想が日本で定着する上で大きな役割を果たしたといえる<sup>82)</sup>。報徳思想は日本的プラグマティズムの形成にとってなくてはならない存在であった。湛山の思想は、この報徳思想に裏打ちされた日本的プラグマティズムの展開であったといえよう。

湛山の思想には大正デモクラシーが抱えていた内には民本主義、外には帝国主義という超えがたい限界を超えようとする可能性が秘められていた。しかしそれは戦前には具体化されることはなかった。湛山の思想は前述のように単に欧米のプラグマティズムを受容しただけでもなく、あるいは王堂が解釈した報徳思想を継承しただけでもなかった。この点で湛山の農業政策の理念は、報徳思想を介して生み出された日本的プラグマティズムを生かし、それに基づいて実際の農業問題（あるいは経済問題）に立ち向かうことによって形成されたといえるのである。

## 注

- 1) 総裁選は、第一回目の投票数が、岸信介 223 票、石橋湛山 151 票、石井光次郎 137 票であったが、第二回目の投票数が、石橋湛山 258 票、岸信介 251 票、無効 1 票となり、湛山が二回目の投票で岸を逆転した。佐高信『湛山除名—小日本主義の運命』、岩波現代文庫、2004 年、276～82 ページ。その後の政治的な影響力については、田中秀征『日本リベラルと石橋湛山—いま政治が必要としていること』、講談社、2004 年。
- 2) 当時の対中国の外交面での活躍については、増田弘『石橋湛山—リベラリストの真髓』、中公新書、1995 年、217～45 ページ；姜克実『晩年の石橋湛山と平和主義—脱冷戦と護憲・軍備全廃の理想を目指して』、明石書店、2006 年。
- 3) 竹内好『近代の超克』、筑摩書房、1983 年、161～5 ページ。
- 4) 半藤一利『戦う石橋湛山 新版』、東洋経済新報社、2001 年；小島直記『気概の人 石橋湛山』、東洋経済

新報社、2004年。

- 5) 石橋湛山「新年の銘」(石橋湛山全集編纂委員会編『石橋湛山全集』第14巻、東洋経済新報社、1970年、521～2ページ)。
- 6) 石橋湛山「卒業生諸君におくる」(同上書、523～4ページ)。
- 7) 湛山の多くの著述は、石橋湛山全集編纂委員会編『石橋湛山全集』全15巻、東洋経済新報社、1970～72年に結実した。
- 8) 農業思想の側面については、拙稿「二宮尊徳における農業思想の形成」(『農林業問題研究』、第19巻1号、1983年、28～36ページ)。篠原孝『農的小日本主義の勧め』(柏書房、1985年)という湛山の小日本主義を冠した農業問題に関する著書が刊行されているが、この著書は湛山による農業政策論を継承したものではない。「自立的生き方への模索」や「農的生き方の再発見」など人間中心の経済論が展開されているものの、工業や貿易に関して湛山の『新農業政策の提唱』とは異なる結論に至っている。
- 9) 当時の農業政策の展開については、平賀明彦『戦前日本農業政策史の研究 1920 - 1945』、日本経済評論社、2003年；拙稿「農村経済更生と石黒忠篤一報徳思想との関連をめぐって」(『京都産業大学論集社会科学系列』、第22号、2005年、111～27ページ)。
- 10) 姜克実『石橋湛山の思想史的研究』、早稲田大学出版部、1992年、20～1ページ。日蓮主義の展開については、戸頃重基『近代社会と日蓮主義』、評論社、1990年；大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』、法蔵館、2001年。宮沢賢治と日蓮主義については、丹治昭義『宗教詩人 宮沢賢治—大乘仏教にもとづく世界観』、中公新書、1996年；龍門寺文蔵『「雨ニモマケズ」の根本思想—宮沢賢治の法華経日蓮主義』、大蔵出版、1991年。
- 11) 石村柳三『石橋湛山—信念を背負った言説』、高文堂出版社、2004年、76～112ページ。
- 12) 増田弘、前掲書、1995年、21～5ページ。
- 13) 石橋湛山『湛山回想』、岩波文庫、1985年、75～8ページ。湛山は旧制甲府中学の在学中に、校長であった大島正健(1859 - 1938)が札幌農学校の1期生であったことから、クラーク(William Smith Clark, 1826-1886)の話聞き、大きな影響を受けている。同上書、1985年、29～30ページ；佐高信、前掲書、2004年、272ページ。
- 14) 判沢弘『土着の思想—近代日本のマイノリティーたち』、紀伊國屋書店、1979年、46～7ページ。
- 15) 1901(明治34)年に日本女子大学校を設立した成瀬仁蔵(1858 - 1919)は、王堂とほぼ同時期にアメリカへ留学してジェームズからプラグマティズムの影響を受けた。影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想—成瀬的プラグマティズムと日本女子大学校における教育』、風間書房、1994年、82～107ページ。
- 16) 磯野友彦『田中王堂とジョン・デューイ』(『日本デューイ学会紀要』、第21号、1980年、76～81ページ)。デューイについては日本デューイ学会編『ジョン・デューイ—その人と思想』、春秋社、1959年。
- 17) 魚津郁夫『プラグマティズムの思想』、ちくま学芸文庫、2006年、11-3ページ。この点でプラグマティズムが向かうのは、「出発点」の確実性ではなく、「結果」や「帰結」の豊饒さである。野家啓一『増補 科学の解釈学』、ちくま学芸文庫、2007年、284～97ページ。
- 18) 上山春平『プラグマティズムの哲学』(上山春平編『世界の名著 59 パース ジェイムズ デューイ』、中央公論社、1980年、7～48ページ)。
- 19) 本稿はプラグマティズム自体を論ずることを目的としていないので、紙数の関係上、詳細な説明は省

- 略する。プラグマティズムについては、とりあえず W.ジェイムズ著・榊田啓三郎訳『プラグマティズム』、岩波文庫、1957年；フィリップ・P.ウィーナー著/田島正樹訳「プラグマティズム」（フィリップ・P.ウィーナー編『西洋思想大事典』、第4巻、平凡社、1990年、106～26ページ）。
- 20) 中里良男「プラグマティズム—田中王堂」（『比較思想研究』、第8号、1981年、9～13ページ）。王堂に関する研究については、堀真清「田中王堂研究・覚書」（『早稲田政治経済学雑誌』、第349号、2002年、15～49ページ）。
- 21) 田中王堂『徹底個人主義』、関書院、1948年、96～111ページ。
- 22) 久野収・上山春平「『プラグマティズム』概説」（久野収・訳者代表『世界思想教養全集14 プラグマティズム』、河出書房新社、1963年、3～18ページ）。
- 23) 石橋湛山「時局下の思想問題」（石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第11巻、1972年、271～86ページ）。
- 24) 姜克実、前掲書、1992年、46～7ページ。
- 25) 田中王堂、前掲書、1948年、221～2ページ。
- 26) 魚津郁夫、前掲書、2006年、224～31ページ。
- 27) 磯野友彦「田中王堂の哲学思想」（『社会科学討究』、第31巻3号、1986年、27～51ページ）。
- 28) 王堂は福沢についても同様に、実験的なこと、作用的なこと、進化論的なことという特徴をあげ、徹底した功利主義者であったと評価している。田中喜一『福沢論吉』、実業の世界社、1915年、51～64ページ。
- 29) 長谷川如是閑「王堂哲学について」（田中王堂、前掲書、1948年、4～6ページ）。
- 30) 拙稿、前掲論文、1983年、28～36ページ。
- 31) 尊徳における天道と人道の特徴については、下程勇吉『天道と人道—二宮尊徳の哲学』、岩波書店、1942年。
- 32) 拙稿「江戸時代後期の農業思想における自然と生産」（『農林業問題研究』、第20巻3号、1984年、124～31ページ）。
- 33) 報徳思想が新たな農業技術を生み出すことはなかった。新技術が生み出されることはなかったものの、報徳思想の普及者であった安居院庄七（1789－1863）によって、短冊形苗代・深耕・正条植などの稲作技術の普及が、「報徳の技術」と名付けられて報徳思想の普及と同時並行的に進む。安居院庄七「報徳作大益細傳記（田畑作立大益秘傳）」（鷲山恭平『報徳開拓者安居院義道』、大日本報徳社、1953年、150～66ページ）；小川誠「中遠における水稲生産力の形成過程—明治中期を中心として」（農業発達史調査会編『日本農業発達史 別巻 下巻』、中央公論社、1959年、233～43ページ）。
- 34) 福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂『二宮翁夜話』、岩波文庫、1933年、56～7ページ。
- 35) これは現代社会においても、報徳思想が抱え続けている課題である。拙稿「マイクロクレジットと報徳論の課題—バングラデシュのグラミン銀行をめぐって」（報徳福運社報徳博物館編『国際二宮尊徳思想学会 第三回学術大会 報告書』、報徳福運社報徳博物館、2007年、43～59ページ）。
- 36) 拙稿「報徳思想の展開と結社運動」（『農林業問題研究』、第20巻1号、1984年、31～8ページ）。
- 37) 福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂、前掲書、1933年、35ページ。
- 38) 逆に相対主義的な認識は、科学を方法に関わる問題にってしまったという理由で、プラグマティズムが非難される点でもある。河村望『G・H・ミードと伊波普猷—プラグマティズムと沖縄学』、新樹社、



- 1996年、28～31ページ。
- 39) 福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂、前掲書、1933年、36ページ。
  - 40) 姜克実、前掲書、1992年、271～73ページ。
  - 41) 松尾尊兌編『石橋湛山評論集』、岩波文庫、1984年、35～8ページ。
  - 42) 王堂による尊徳観は、哲学においては服部辨之助『二宮尊徳の哲学』（現代教養文庫、1952年）へと継承され、尊徳は哲学者として評価される。
  - 43) 山田英世「田中王堂の二宮尊徳論」（『比較思想研究』、第8号、1981年、124～7ページ）。
  - 44) ここでいう哲学は実用の学であり、実学であるとされ、哲学と実行とは切り離すことができないものとされる。服部辨之助、前掲書、1952年、65～8ページ。
  - 45) このことは湛山の農業政策論だけでなく、社会政策論の根底になる。湛山の社会政策論は、自由競争による個人的欲望の無制限的發展を是正する方法として考えられる。姜克実「若き石橋湛山の文明時評一師田中王堂とのかかわり」（『史観』、第118冊、1988年、19～31ページ）。
  - 46) 田中王堂『ヒューマニスト二宮尊徳』、関書院、1948年、序文2～5ページ。
  - 47) 石橋湛山「二宮尊徳の自由思想」（石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第11巻、東洋経済新報社、1972年、523～5ページ）。
  - 48) 小日本主義と相反する大日本主義への批判は、石橋湛山「大日本主義の幻想」（松尾尊兌編、前掲書、1984年、101～21ページ）。
  - 49) 姜克実、前掲書、1992年、157～60ページ。湛山の経済思想に関する研究史については、柳澤治「日本経済思想史：戦前・戦後期の経済思想一過去20年の研究状況」（『経済学史学会年報』、第46号、2004年、67～82ページ）。
  - 50) 湛山以前の『東洋経済新報』誌にも、帝国主義批判を唱えた植松考昭（1876－1912）の小日本主義論や、それをさらに展開した三浦鏡太郎（1874－1972）の小日本主義論が発表されていた。杉原四郎・長幸男編『日本経済思想史読本』、東洋経済新報社、1979年、106～9ページ。
  - 51) 小日本主義という用語を使っていないものの、湛山と類似の功利的で経済合理主義的な考え方は国際派エコノミストの添田寿一（1864－1929）にもみられる。拙稿「添田寿一の経済思想一報徳思想の評価をめぐって」（『報徳学』、第2号、2005年、40～50ページ）。
  - 52) 大國に對置する小國論は、岩倉使節団の『米歐回覽実記』にもすでにみられるが、その後の愛國心教育につながっていく。久米邦武編・田中彰校注『特命全權大使 米歐回覽実記（五）』、岩波文庫、1982年。しかし田中彰（『小國主義一日本の近代を讀みなおす』、岩波新書、1999年；『明治維新と西洋文明一岩倉使節団は何を見たか』、岩波新書、2003年）によれば、岩倉使節団は小國主義を内包していたという。
  - 53) 石橋湛山「一切を棄つるの覚悟」「大日本主義の幻想」（松尾尊兌編、前掲書、1984年、94～121ページ）。
  - 54) 石橋湛山「先ず功利主義者たれ」（石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第1巻、1971年、405～7ページ）。
  - 55) 高野善一『石橋湛山の森－可能性への挑戦』（長幸男編『石橋湛山一人と思想』、東洋経済新報社、1974年、122～6ページ）。
  - 56) 石橋湛山「米価が景氣に影響する経路」（石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第3巻、1972年、200

- ページ) ; 「調査会の任務」(石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第2巻、1972年、383ページ)。
- 57) 石橋湛山「米価調整案」(石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第2巻、1972年、382～3ページ)。
- 58) 石橋湛山「問題の社会化」(松尾尊兌編、前掲書、1984年、15～7ページ)。
- 59) 石橋湛山、前掲書、1985年、287～90ページ。
- 60) 常平倉とは米を米価の安い時期に購入し、高くなると放出するという制度あるいはそれを担当する官庁である。その起源は奈良時代後半にさかのぼるが、平安時代にも一時設置され、江戸時代にも設置した藩があった。
- 61) 石橋湛山「不安なる米穀調節案」(石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第4巻、1972年、406～7ページ)。
- 62) 同上書、408～13ページ。
- 63) 柏祐賢「日本農業概論」(『柏祐賢著作集』第8巻、京都産業大学出版会、1986年、64～87ページ)。
- 64) 平賀明彦、前掲書、2003年、63～120ページ。
- 65) 拙稿「農村経済更生と石黒忠篤一報徳思想との関連をめぐって」(『京都産業大学論集 社会科学系列』、第22号、2005年、111～27ページ) ; 拙稿「農政の神様と二宮尊徳—その出会いと国際化をめぐって」(劉金才・草山昭編『報徳思想研究の過去と未来』、学苑出版社、2006年、286～300ページ)。
- 66) 石橋湛山「新農業政策の提唱」(石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第5巻、1971年、311～8ページ)。
- 67) 同上書、319～30ページ。
- 68) 同上書、396～413ページ。
- 69) 軍国主義に対する批判は一貫して続けられ、湛山の政治思想の根幹をなしている。田中秀征『日本リベラルと石橋湛山—いま政治が必要としていること』、講談社、2004年 ; 姜克實『晩年の石橋湛山と平和主義—脱冷戦と護憲・軍備全廃の理想を目指して』、明石書店、2006年。
- 70) 石橋湛山「新農業政策の提唱」(石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第5巻、1971年、378～90ページ)。
- 71) 多くの著書や文献があるが、ここではとりあえず日本経済新聞社編『地方分権の虚実—自立の条件を求めて』、日本経済新聞社、1994年 ; 神野直彦『地域再生の経済学』、中央公論新社、2002年 ; 神野直彦ほか編『自立した地域経済のデザイン—生産と生活の公共空間』、有斐閣、2004年。
- 72) 石橋湛山、前掲書、1985年、351～4ページ。
- 73) 農工商併進論は、湛山以外にも日本の農政学においてその系譜がある。岩本由輝「日本における農工商鼎立併進論の系譜—横井時敬・新渡戸稲造・松崎蔵之助・柳田國男・河上肇」(『山形大学紀要(社会科学)』、第17巻2号、1987年、243～61ページ)。柳田國男(1875 - 1962)も中農養成策の一環として農工商併進論を唱えている。三苦利幸「柳田國男の「国民—国家」構想—農政学と民俗学」(『社会思想史研究』、第24号、2000年、107～18ページ)。
- 74) 長幸男「湛山の経済思想」(長幸男編、前掲書、1974年、163～70ページ)。
- 75) 姜克實『石橋湛山—自由主義の背骨』、丸善ライブラリー、1994年、81ページ。
- 76) 石橋湛山「二宮尊徳翁と福沢諭吉翁」(石橋湛山全集編纂委員会編、前掲書、第13巻、1970年、512～3ページ)。
- 77) 河村望、前掲書、1996年、85～192ページ。

- 78) プラグマティズムの影響を受けたとされる戦後の日本の教育についても、同様の問題を抱えている。デューイの教育理論は、占領下の日本で大きな影響をもったが、新教育の名のもとに広められたものは、デューイが1930年代に自身の児童中心主義からの逸脱として戒めたものに近いものであったとされる。デューイ著・宮原誠一訳『学校と社会』、岩波文庫、1957年。
- 79) 服部辨之助、前掲書、1952年、3ページ。
- 80) 判沢弘、前掲書、1979年、65ページ。
- 81) 長幸男『日本経済思想史研究』、未来社、1963年、260～9ページ。
- 82) これはプラグマティズムだけに限らず、欧米の社会政策や地方自治、そして協同組合思想などが、わが国に定着する場合も同様であった。拙稿「20世紀初頭日本における報徳主義の役割」（『報徳学』、創刊号、2004年、32～44ページ）。

# Tanzan Ishibashi's Agro-politics Theory and Hotoku Thought

Nobuhisa NAMIMATSU

## Abstract

Tanzan Ishibashi (1884-1973) served as finance minister in 1946, minister of international trade and industry in 1954, and became prime minister in 1956. In his later years he was installed as president of Risscho University. But he has left the great mark as economic analyst, not as minister. It is special mentions that he advocated “small Japan principle” and “new agro-politics”.

Tanzan were greatly influenced by Oudo Tanaka (1868-1932), a first introducer of American pragmatism into Japan, in his school days. After Oudo came back to Japan, he evaluated two persons' achievements; Yukichi Fukuzawa (1835-1901) and Sontoku Ninomiya (1787-1856). Sontoku who was written by Oudo formed Hotoku thought which consisted of self-control and social reform. It was said that Sontoku was not a social reformer, but a philosopher who laid on individualism and experimental idealism.

Tanzan was under the influence of Hotoku thought because Oudo thought that Sontoku was a representative of Japanese pragmatists. The concepts of “small Japan principle” and “new agro-politics” were a clear manifestation of Hotoku thought. Tanzan had two fundamental ideas. One idea was that we had to attach greater importance to human resources than to natural resources. The other idea was that agricultural profit was not low. Tanzan thought about agriculture and economy not from production and distribution, but from human living.

Hotoku thought was noticed by Oudo, and knowledge of this thought was handed down from Oudo to Tanzan, that is to say, Japanese pragmatism was developed by Sontoku-Oudo-Tanzan. This process was that Western thought (American pragmatism) and Japanese traditional thought (Hotoku) came together and put into practice.

**Keywords :** Tanzan Ishibashi, Oudo Tanaka, Agro-politics, Hotoku Thought, Pragmatism